

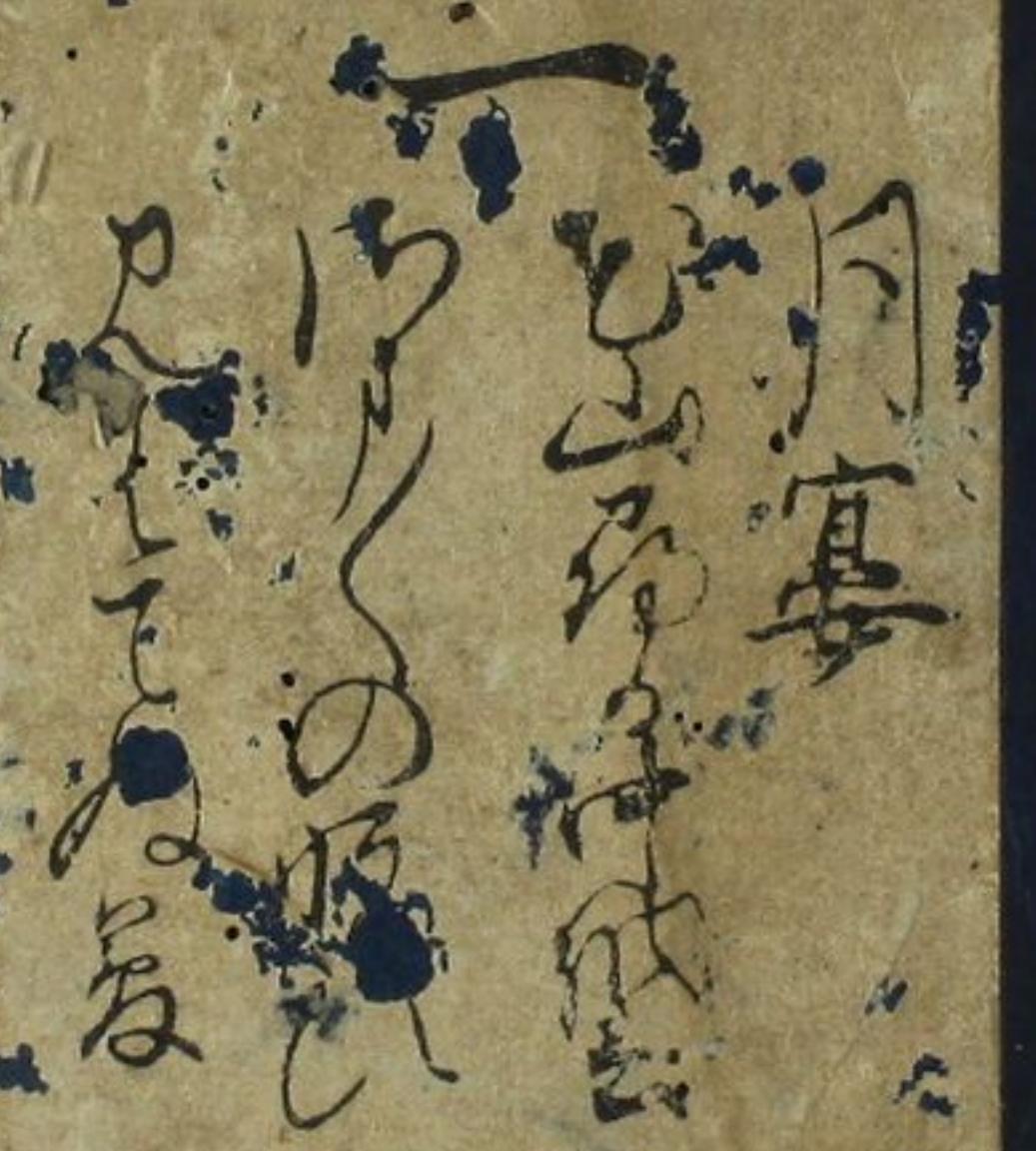
7 8 9 60 1 2 3 4 5 6 7

80

70

7 8 9 60 1 2 3 4 5 6 7

宋七物語



宋花物語一

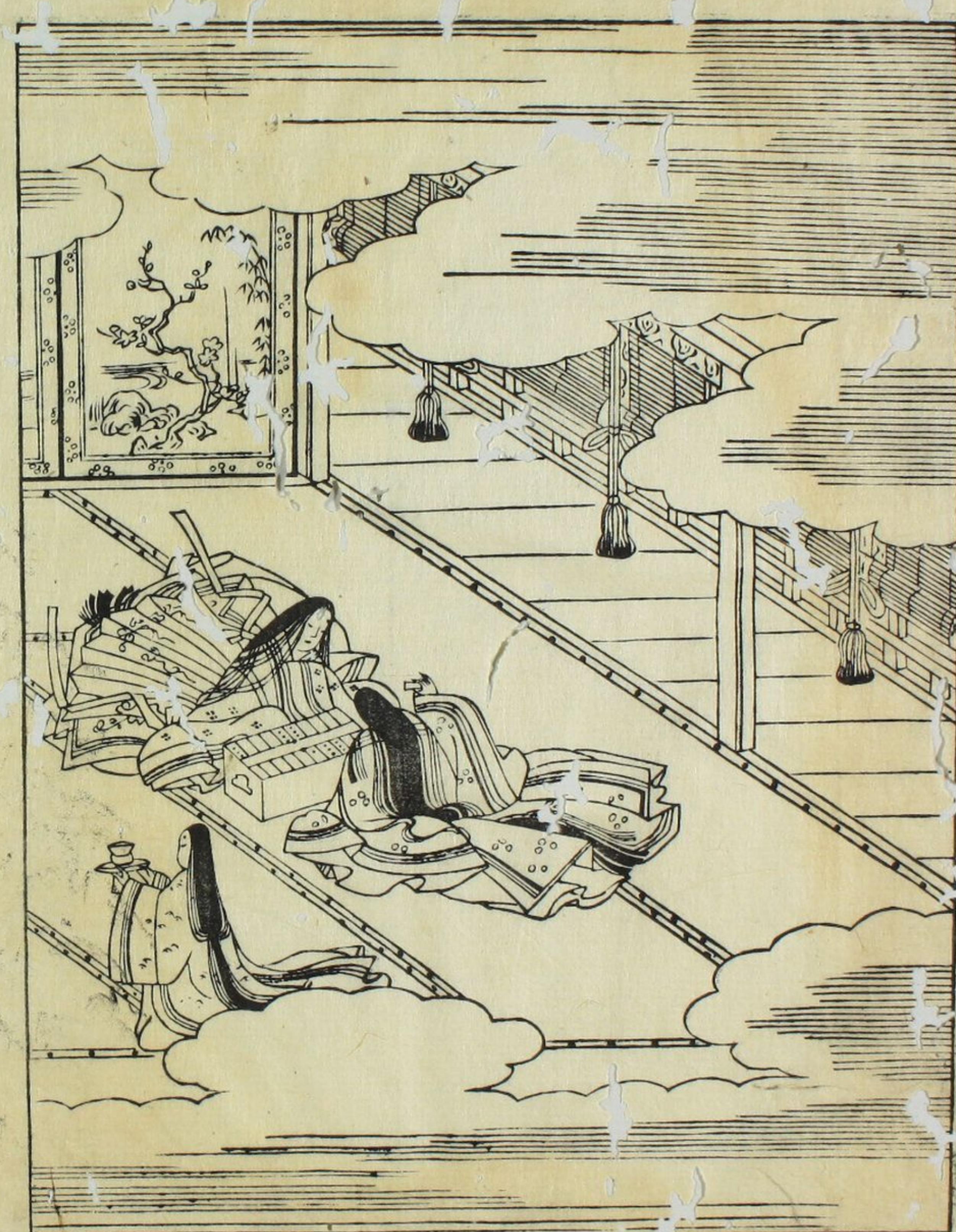
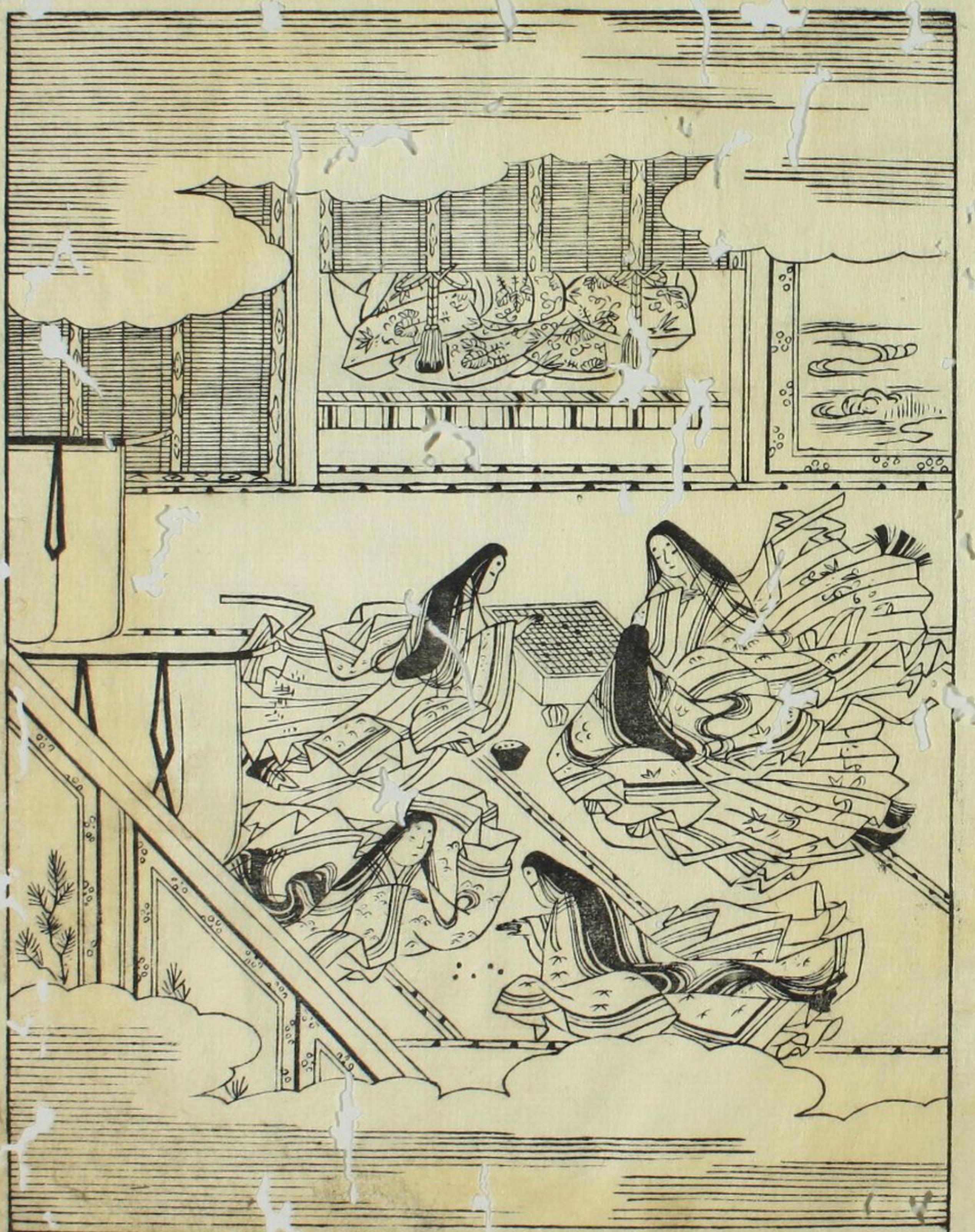
月算



せけりてほじまの門六千余代はるゝをば
えれ此この波かとけよりすのこりしり
てわすととふすさせやよ守ぬて門
足らむおもひてうりのすとくへたりゆ
がりよりやか小一の足て敷にの段玉とげ
お修にとけ行けとん砲も皇帝もと
せやよふれあきとんありよいとまれ
れはとくはとくとくとくとくとくとくとく
けよ。けりすけうちともひ行れ、男

と二十六人女三十九人男三十人
を改ふ食奉殿の御代をもてけひ守る門
の内はうき行け中幼ちも女とすりは
を改ふ后を嗣のれを帝としわけは
賛を改ふ后をさやけかのれニ帝としわ
けとてりとつみれむとけてはすれ達
駕宣ふれすくらりとの基殿の
うりうちを御ハ河平とさくらんと后ア
お行ては九とてをうとけよげは御仲平と
さきしげたん后とさくらうとてセナとと
御ナタリニ御重平とさくらけと位とと
けされに帝忠平のゆくとを改ふ后とと

和ノ年はすとと行けとの基殿の
のすれれけよと、うめうりのすとがう
りあとのえ寛明れはととけの門よみを
て十六年や一兩ではよトとととてがり
けとせ東産はのととけの門よみを
せれのねねやとと成明の親王ととけの
はととと門よみをすくりとまれとと月す
三月ととわととけの東産はのすくりがう
ととくとととととととととととととと
ととととととととととととととととと
ととととととととととととととととと



りくさんみのれひてたれしやまもひじりひがき
あさすけはくちよくいにわのゆゑ
せあらぬうりうりのをひくとこへる
のるのれよだらはるせとのせよ
とせとまうづまうりてがよそとせ
めんとじげをやいのたかとてすれ
とさきて小地まとよふと住まはる
人合と仰神のれ九条とよふと住まはる
とあーのれまくはつるにあら仰神仰
けん納とまくとが行けぬあら仰神仰
とまきて小一系とよふと住まはる

の室明のひやくのあれしよもせびとてかとひ
文がるへえやかねば明のゆ勢のあれは女隸
ゑのすれととさをいきよ文正衡のきりと納を
のじよめのうちれは思ふととさをいきよ下一
の仰キれる芳子のれち、う宇は莊子宣
翫後のすれとよよよ又底情や内モ吉を廢明れ女
いわくの心モ吉ふとてかりよゆくもじゆく
ゆよけれきあわうかとこじきれまよやすふ
うちれきよと年に東あもく二丁ひうをねゆよ
あもなきせうくねよあらさあいおれくこくじ
うくとく見てけほふれ京後

おもててえりあつまわらしきぬ一のとせ伊勢
のゆきとふしよひにきててやうのれ
月しゆくにわくかむ
おとくゆくはりてんす
みいとさかのま
攀鳥平
鳥平内藤院
え女保子
こゑあうまきのねめりへ正元
こにのあきれまぬ又宣懶芳子
めのれゑる妻子
れりかれりことのよひとくかきひより
八方重明
みゆきそ
けよりくわら樂子
こゑあうまきのねめりへ莊子
れりかれりことのよひとくかきひより
八方計子
みゆきそ
けよりくわら規子

は後衰傷

子孫衰傷

は後長傷
ましにあらわすもよしにせば
まじてけいひをとこのむかわく門
はるかわやまたわよけゆりのよ
そよいかのとけりもめれす帝の御天平
勝寛のよたんに構へ諸凡諸大夫小其
萬葉集と拂せぬみことの文帝折河ハタケ今葉九卷

えりゆくはすまでもよりてかきせぬるまで
大本のうゑの、アガヤリたる事あり
とおもひてせりてある。まほらにひづ
とおもひてせりてある。まほらにひづ
とおもひてせりてある。まほらにひづ
てはよ既すには、既集とよ居とれどもすて
ニト。老院セシ房の、既せし小物の多
の、今もしく入ぬやう。今よ、老院の序記
が、いそては、あはね院の既の、今よ、老院の序記
也や。老院の既の、今よ、老院の序記
もと、といふが、とやうて、いふて、い
はうりある、いが、とやうて、い
てにやうて、い

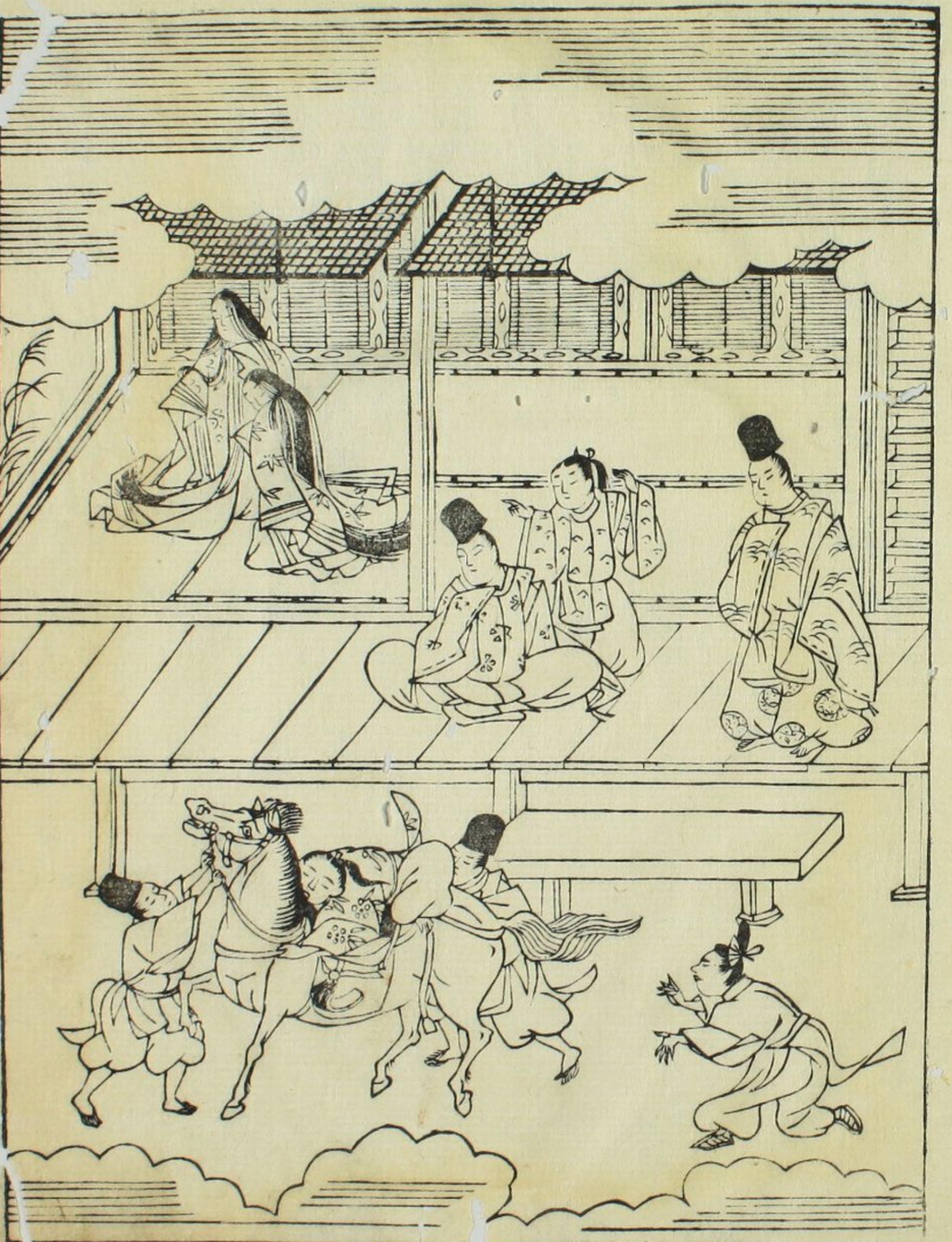
金泉文



○村上の先帝のれやとくま宣祖の女れは
ひよしきけよすかうよくさとくを
うかがひそへとくわゆかよかひいておうれからくは
のれアハシタヒトヒトセトクをとくはよめくは
行へる一乗のえんぬよいかうふじ事れれれれれれ

人間處えひよをすみけぬ母^{ハナ}内
敷志の心せうりえいとすまくを娘^{城子}にけ
めうでうれきまがひへあくすひもとじい
うかの小一束の事おのそもんじよのいを
ほほくわくとくはふかひうねてこひへあく
まつうくはくはくはくはくはくはくはく
うてやくまくらはくはくはくはくはくはく
うはくはくはくはくはくはくはくはくはく
てえすふかうてはくはくはくはくはく
やくはくはくはくはくはくはくはくはく
ひ事^{相仕}おとせやうよのむこと^{通時}娘^娘れんと男
おも令^{おも}おとせとひてひますとふくはくはくはく

うそ代^代返^返しやア^アとまのひげとの^のを
えくいあととくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
じまふのとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく



がれはる冷ひ度ひ
まほすのへあこま
まほすとおんかみ
アサムシトキ
がくまくまくまく
庵度の風や
あゆのそとくわ
あいのくわ
祀て
永年
かの空の事ね
門の事ね
こよみ
人死
死する事ね
死する事ね
死する事ね

蒙古文手稿

蒙古文

も山後先光多の微風モヒンよりす如行て、有りと
も

寬
紀元年

ぬるの門を出でて此門があれやうの方に又の初シ署ス

じ山はこゝの山
は然ゆる山也
もとより山也
とて山也
山也とて山也
山也とて山也
山也とて山也

۱۳
۱۲
۱۱

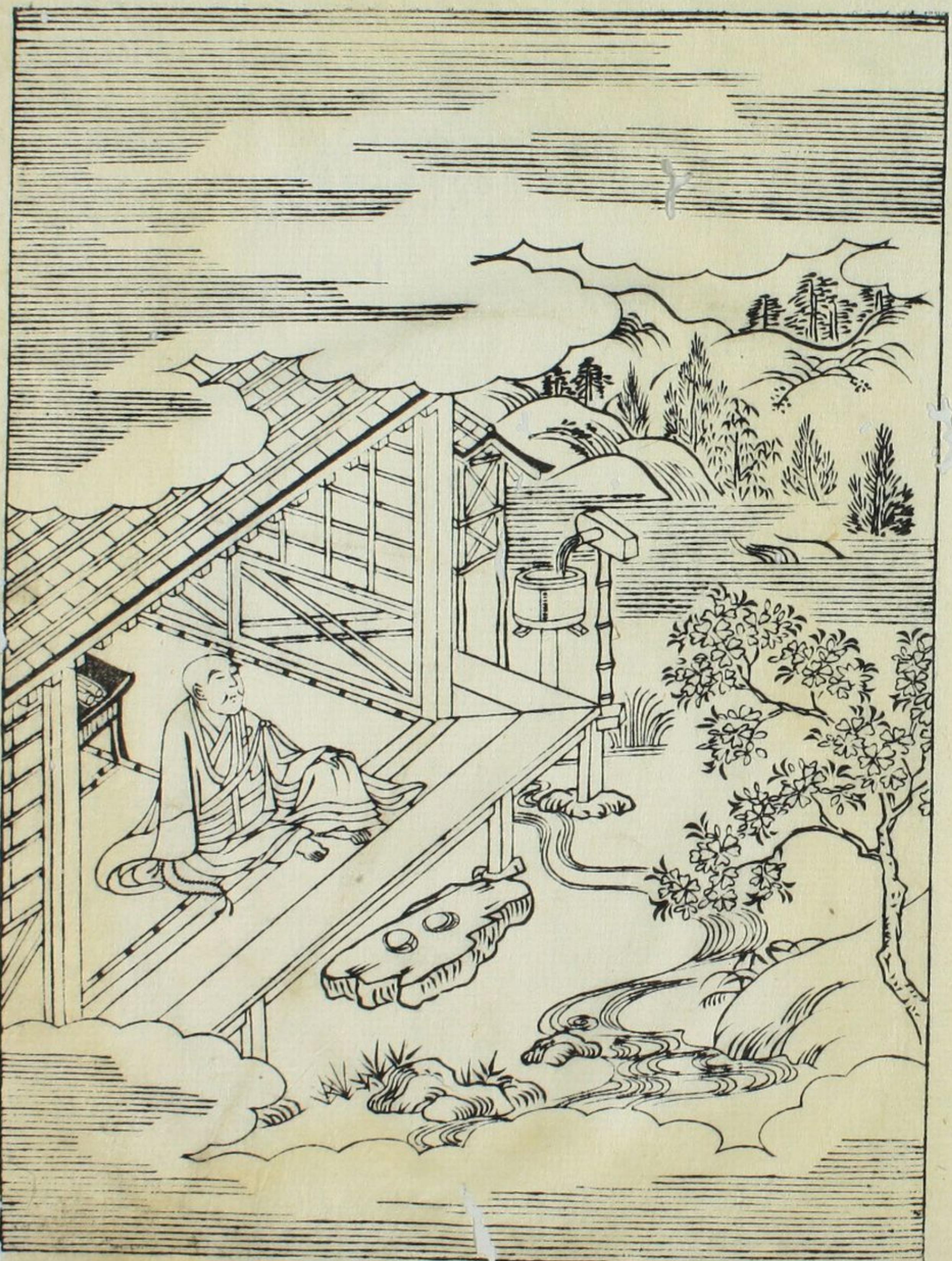
れどりの入道守内義康もうとくをかねておひでし
紋室とよふすらきをもじりてゆきにせつやうにほ
うもあひはいがくことせんりしておまつとし月
の房のふのほたるよかわうりよのむかわ
いきこらまくさけいじくをかわせりとのはと

モニモニモニ

は松風

三

あけく那憎成のすいにじるひのくわく
の佛の心をそぞろ見てゆきにあ



卷之三

も山はやかへうをひてくふ道より
あらわすけよめれとくとく清て
旅の宿よひの極處のゆきくは
かくのりいのりのりとれおせけ旅の宿よ
まきとせけりのりとれおせけりのりと
せすておゆるとくよ而のりとくよとく
わよとくよとくよとくよとくよとくよとく
ありわくとくよとくよとくよとくよとく

伊キムサ
ひく度あら度の九れはよかとあゆまし
はふつもくもくのとくじよみけとどいて
羽うねはゆきやふりよみゆいにゆきとも
けふゆくゆくゆくよくじよくとくとく
ゆうとうとうとうとうじよくじよくじよく
てうううううううううううううううう
口うううううううううううううううう
ぬうううううううううううううううう
ぬうううううううううううううううう
てせのぬとくまとてせのぬとくまと
がくすはまくまくまくまくまくまく

蒙古文



うの宿泊とばかりしてかがりうて三月
官の宣旨小軍の病の男を上へとすい方友をひき
まくさうさんへトもあまし西の官事もほげ
ありとこりよしのまことの家事もおまかせわ
からまついて三月あるうちのぬわくし
まくすうすううはうがうめり配さす
あけひよくわらわらうかくわらわらす
よのわらわらわらわらわらわらわらわら
うしょれいよすふやく
成患女

高僧成忠

このいとこもくわく作てらるゝ事
わざとさうしてひとひきよめ
がたりますされ、
特官月をかまふ室禮處の二年
くわくますとよとよりたれ
力ち将をもととすとくわく
まよひにわいたる府筆がみのみとる葬送
あひをもて四月の日とくわく
かくねくわくわくわく
内ふと廢せやあ、
ゆじき也きわづきてこめえもと

がつはまやかにひきゆゑを教へのせんせんま
しよくに仕あらへる人といふとおもひて
わざやせかへりひきゆゑを教へるやせ
ほげてまよをあむるはまかはな
がくわくぬまよんをうけたまふを
とくまくてもくぐりこむるを
てほくぬまよんをうけたまふを
まよはまよ月二日午後八時
わくじよくまよくまよとあらう
てまよとまよとまよとまよとまよと
よくまよとまよとまよとまよとまよと
まよとまよとまよとまよとまよとまよと
まよとまよとまよとまよとまよとまよと

トモのあらわしげとあはげ
シカくわづか、おもてをすりき
足のよれし軍服つらうきゆふく
むじゆくわざわざのくわく
さぬまにまほんの浦野あくまく
よひくわざわざのくわく
トモのあらわしげとあはげ
シカくわづか、おもてをすりき
足のよれし軍服つらうきゆふく
むじゆくわざわざのくわく
さぬまにまほんの浦野あくまく
よひくわざわざのくわく

道義
東家
保支

傳信公

月夜の車中、御内を清流傳却と云ふ。此方へ來しとばしに、其の事は

詞花雜
とくすを處するもむかしとてぢらうげ
るるてすむかへりてはるるとま
あひゆくとくもと月の有りてア
あくまでわらわ
がよがよすゆれいとじ
ひゐるをといたいわがとさつ
とくうそてゆうとくよもよめのや
くちでやうてわら
うるひよて、ゆくとく
よもよけわしゆくゆく
とくすいにま
月の九日も

せよひ魚をかく内八
の門へ入る
てはまくらに
しゆくまくらに
くらむくらに

此後更無事
事事皆如意

也之爲多也也

明吹道吹

一ノ三十八

卷之三



